トマリ～近世の玄関口

「リイシリ」が歴史上に登場するのは、1644（正保元）年の「正保国絵図」です。1670（寛文10）年の「津軽一統志」には、アイヌと和人（松前藩）が交易をしていた商場がすでに設置されていたと記されています。18世紀に入ると、有力商人にアイヌとの交易や商場の経営を請け負わせ税金を納めさせる場所請負制度が確立。利尻・礼文を包括するリイシリ場所は、船が停泊しやすく、両島の距離が近い本泊湾が選ばれ、拠点施設となった運上屋が湾奥部に置かれました。場所請負人は、1765（明和2）年に近江商人である岡田家（恵比須屋）から始まり、代を替えながら、1823（文政6）年に同じく近江商人の藤野家（柏屋）が請負い、1869（明治2）年に制度が廃止されるまで続きました。1846（弘化3）年に松浦武四郎が著した「西蝦夷日誌」には、リイシリ場所の産物として、ニシンやタラ、アワビ、ナマコ（煎海鼠）、昆布などが挙げられています。また周辺には、運上屋から上がる石段のほか、文政期以降、奥の院や本泊神社に寄進された石鳥居や灯篭などが今でも残されています。

安政期におけるトマリ運上家のようす

＊「リイシリ異略図」のトマリ部分を拡大

①運上家（屋）
②利意志利権現社（山の神）　＊現在の本泊神社および奥の院
③稲荷社（豊漁の神）
④弁天社（海の神）
⑤石段　⑥井戸　⑦番屋、蔵　⑧アイヌ家屋

参照：松浦武四郎　安政3年「東西蝦夷場所境目取調書上」

ニシン漁の栄華

「利尻島の漁業遺産群と生活文化」が2018（平成30）年に北海道遺産に選定されました。その核となる遺産は、ニシン漁にかかわるもので、番屋や袋潤、元標、釜場などが少なからず現存しています。なかでも、鷲泊にある泉の袋潤は、1916（大正5）年築造ながら現役で使われており、遺産群のなかで象徴的な存在となっています。鬼脇の北見神社境内にある句碑「押しかけた鰊の山や神の幸」が示すように、最盛期で年間10万トンの水揚げを誇ったニシン漁は、明治20年代以降、移住者の増加や近代化におおく貢献しました。その移住元は、北前船の航路上にある青森や秋田などを中心に富山や石川、鳥取までおよぶ日本海地域が主でした。失われつつあるニシンの記憶ですが、当時の写真や漁具などは、郷土資料館や博物館で見学することができます。

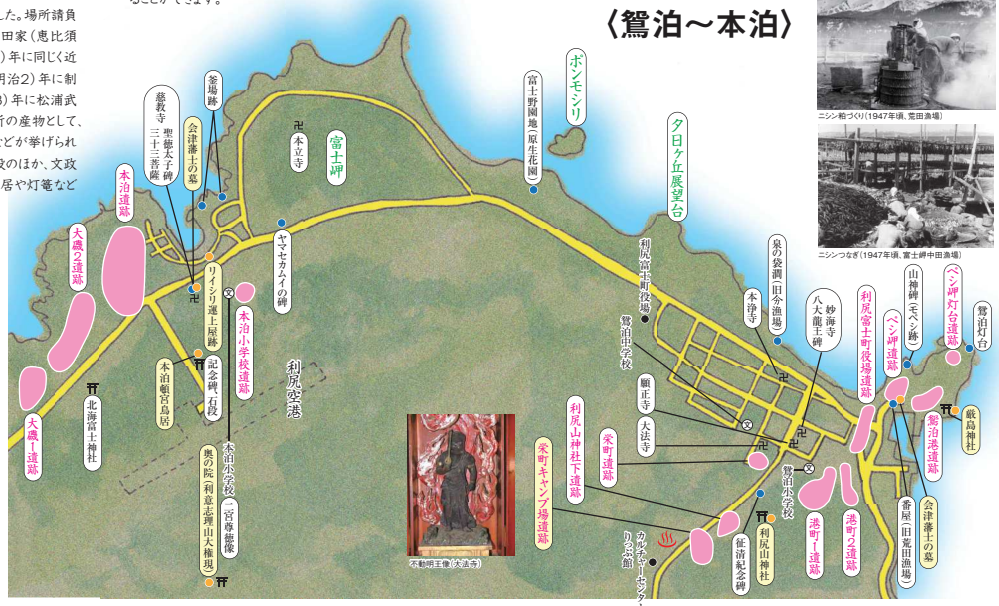
泉の袋潤

ニシン粕づくり（1947年頃、荒田漁場）

ニシンつなぎ（1947年頃、富士岬中田漁場）

凡例
- 町指定文化財
- 遺跡名（理蔵文化財包蔵地）
- 卍 ⛩（その他の文化財など）
- ⊗ 学校
- ● 施設他

〈鷲泊～本泊〉



ペシ岬ヒストリー

鷲泊港に高くそびえるペシ岬には、数多くの文化遺産が分布しています。オホーツク文化期の遺跡のほか、近世では会津藩士の墓や厳島神社、近代では1892（明治25）年点灯の鷲泊灯台（初代は円形の石造灯台）があります。名称の由来は、アイヌ語「シペシ（大きな崖）」ですが、過去にもう1つ小さな崖を表わす「モペシ」という小山がありました。その跡地には、山神という石碑がのこっていますが、ではなぜ今は見ることができないのでしょうか。そこには、北海道遺産である稚内の北防波堤ドームが大きくかかわっています。昭和初期のドーム建設の際、大量の石材を必要としましたが、その供給先として石材豊富な利尻島に目が向けられました。当初は、湾内の玉石が使われていましたが、尽きるとペシ岬に目が向けられ、モベシをダイナマイトで破壊した後、港までトロッコで運び積み込んだ盤船を汽船で曳いて運びました。石材の多くは防波堤の基石に使われたといわれています。

北を護った会津藩士

18世紀末頃になると、鎖国下にあった日本に対して、ロシア側から通商を求める動きが強くなってきました。日本は、ロシアの要求に対し断固拒否したため、ロシアも武力行使という手段をとってきます。そのターゲットとなったのがロシアから近い樺太や千島、蝦夷地で、1807（文化4）年に利尻島が襲撃に遭い、商船などが焼き払われたり島民が捕虜に捕られたりしました。

会津藩は翌1808年、江戸幕府よりロシア側の襲撃に備えるための蝦夷地防備の命を受け、松前・宗谷・利尻・樺太に出陣しました。利尻島には、梶原平馬以下252名が駐屯し、ロシアとの交戦はなかったものの、病死あるいは樺太警備の帰途に起きた観勢丸漂着事故により、多くの藩士たちが亡くなっています。墓石は、1810（文化7）年に7代藩主松平容衆の命により、新潟で石を刻み松前経由で各地に運ばれたもので、利尻島にはペシ岬・慈教寺・種富町に8基が現存しています。

会津藩士の墓（慈教寺）

吉本書京筆絵馬（19世紀前半?、利尻山神社）

シペシとモベシ

初代鷲泊灯台

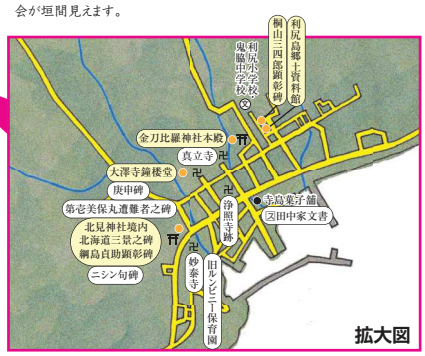
〈鬼脇～沼浦〉

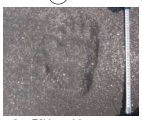
人びとを支えた信仰

近世以前、利尻山は開宮林蔵らにより登山が試みられたものの宗教登山は行われておらず、神社の信仰やアイヌの伝説に限られていました。

はじめての宗教登山というべきもので、1890（明治23）年の天野磯次郎という紀州の行者によるものがあります。現在の登山道の先駆けとして3か月かけて道を切り開き、山頂に不動明王像を安置しました（大法寺所蔵）。また、登山道沿いには、弘法大師（位置不明）や薬師如来（現存）の碑などもあります。

近代以降、移住者が増え集落が形成されるに至って、各地区に神社やお寺が建設されます。神社には、灯篭や狛犬、船絵馬など豊漁や航海安全などを願うものが奉納されました。民間信仰では、おもに青森・秋田出身者によるものとして、庚申碑は10か所、大平山三吉神社碑は5か所現存しています。また、民俗芸能では、富山から南浜へ越中獅子舞、魚取から長浜へ麒麟（きりん）獅子舞が伝わるなど、故郷への思いや結びつきの強い地域社会が垣間見えます。





ヒグマの足跡（2018年）

沼浦神社（1897年建立）

北海道三景之碑（1924年）

ニシン漁で賑わう鬼脇港（1947年頃）

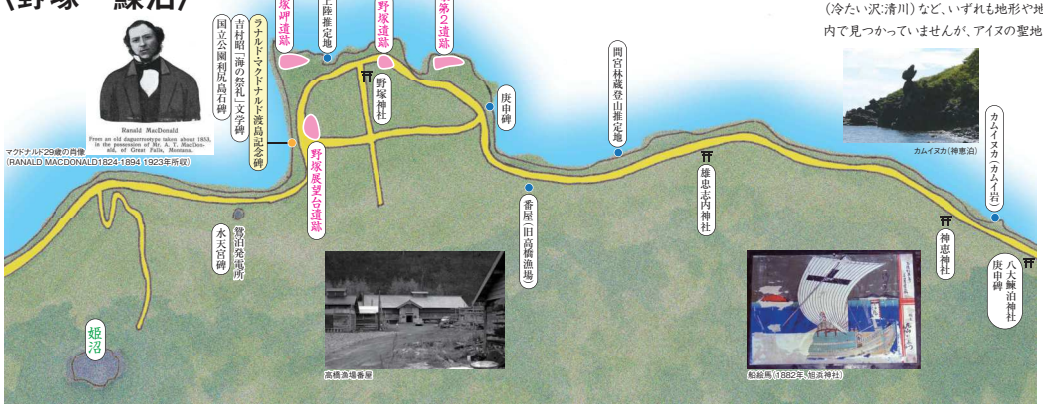
基石（1928年）

宗谷区務所往書留（町指定文化財、郷土資料館所蔵）

アイヌ地名

現在使われている地名の多くは、アイヌ語に由来します。例えば、鷲泊はオストマリ（岬の根元にある入江）、本泊はトマリ（入江）、鬼脇はオンネワキ（大きな境界?）、仙法志はチセホヲチ（小魚の多くいるところ）、香形はクツカンタ（岩の多いその上のところ）、など音の響きをそのまま生かしているもののほか、旧地名で呼ばれていたオタトマリ（砂のある入江:沼浦）、ピヤコロ（石の丘の多くあるところ:新湊）、マタワッカ（冬も凍らない水のあるところ:香形泉町）、ヤムナイ（冷たい沢:清川）など、いずれも地形や地域の特徴をよくとらえています。また、アイヌの砦や祭祀場とされるチャシは島内で見つかっていませんが、アイヌの聖地と思われる地名として、カムイヌカ（神の形・像：神居、神恵泊）があります。

〈野塚～鰊泊〉



Ranald MacDonald
From an old daguerreotype taken about 1858, in the possession of Mr. Ezra Meeker, of Great Falls, Montana.

マクドナルド29歳の肖像（RANALD MACDONALD 1824-1894 1923年所収）

ラナルド・マクドナルド

アメリカ青年ラナルド・マクドナルドが野塚に上陸したのは、1848（嘉永元）年24歳のときで、黒船来航の5年前にあたります。マクドナルドは、鎖国下にあった日本に入国し、江戸でいずれ訪れる外国との通商交渉の場に通訳として、従事したいという思いがありました。そのために、当時日本近海で捕鯨を行なっていたアメリカの捕鯨船に乗り込み、単身ボートで遭難を装い上陸しました。日本での滞在は7か月ほどでしたが、長崎に移送された際に、森山栄之助ら当時の日本人通訳との交流がありました。日本での通訳という夢はかないませんでしたが、森山栄之助はその後の日米通商交渉の場で通訳を務めています。また、吉村昭の小説「海の祭礼」の主人公として取り上げられ、日本の英語教育史に欠かせない存在となっています。現在、利尻高校生を対象としたアメリカへの短期留学は、マクドナルド短期留学と銘打たれており、まさに文化遺産を生かした交流事業として取り組まれています。